

まちに「共生」の種を蒔く

沖縄大学名誉教授

田谷長生会会長

加藤 彰彦

◇はじめに

僕は横浜育ちですが、2002年から沖縄ですっと暮らして、2016年に戻ってきました。これまで、いろんな仕事をしてきましたが、仕事と地域とがうまくつながってなかったことを、沖縄に行くまではなかなか気が付きませんでした。沖縄で自分の生きる現場は地域であることを確信し、仕事も辞めておりますから、今は横浜市栄区の老人クラブ・田谷長生会で活動しています。

◇子どもはどこで育つのか、誰が育てるのか

僕は大学を卒業してすぐ、小学校の教員になりました。非常に楽しかったですよ。子どもが好きで、よく一緒に遊んだり勉強したりしました。そのときは教師が子どもを育て、それから家族が子どもたちを育てると思っていました。だから家庭訪問もよくやり、お母さんお父さんたちといろんな話し合いをしました。でも実は当時の子どもたちは、地域の中のいろんな大人たちと出会って、山や川や海で遊び、農家の手伝いもします。今の子どもたちにはこうした地域でのたくさんの出会いや経験が少ないですね。だからだんだん中学、青年期に入ったときに、親や先生と意見が対立したり別れたりすると、口もきかなくなり、テレビやスマホの世界に入る。暮らしの中で子どもが育つことをもっと考えなくてはいけないと考えています。

僕は4年半やった小学校の教師を辞めるのですが、最大の理由は通信簿でした。当時は相対評価で、2と1を付けるのが辛くて辛くて。だって子どもたちは自分ができないことを分かっている。それなのにわざわざ親やみんなにも知らせなくてはいけないのは変だと考える先生が結構いて、「オール3にする」とか言って、小学校が大変な騒ぎになるんです。僕は3、4、5だけで、1、2はいらないと、学校で大暴れしたんですけど、できないということで教師を辞めることになりました。

その後、どこかに子どもたちを育てる理想の場所があるのではないかと、日本中を放浪する旅に出ます。そうしたらいろんな地域に、共同して自分たちの村を経営するという所があるんです。そうした所に長いところで、半年から一年いっしょに暮らしました。自分たちで保育園や幼稚園をつくり、その中でみんなが交代で教え育てる。とてもいい環境でした。しかし、子ども達が地元の小中学校に行く頃から問題が出てきて、共同体と地域との軋轢等もありました。これはちょっと違うなと思って、もう一回日本中を回ってみました。



◇ドヤ街の公務員になる

ちょうど横浜に戻って来たとき、当時、飛鳥田一雄市長が新しい地域づくりをしようとしていました。三大ドヤ街のひとつと言われている寿町で、学校に行っていない子どもたちを中心に職員をやってもらえないかという話ですが、僕の中学時代の先生からありました。1972年に寿生活館という所で生活相談をすることになります。町の人たちの気持ちが分からないと、なかなか相談に来てくれないと言われましたから、僕もドヤに住むことにしました。銭湯や食堂で、家にいられないような子どもたちと出会います。お父さんとお母さんがけんかして家にいられないと来るようになります。僕の部屋に子ども達を泊める。そうすると僕の寝る所がないもんですから、山下公園に行ってベンチに座っていると、野宿をしている日雇いのおじさんたちとおしゃべりをする。この町に住んでいると町の状況がとてもよく分かってくるわけです。

一人ひとりと話していると、個々いろいろな課題を抱えているのですが、共通する課題も非常によくある。それならみんなで自分の思いを話し合えるような場所をつくらうと思い、「寿と自分を自由に語る会」をつくりました。自分のことを語ろうといっても、最初は来ないでね。でもだんだん顔見知りが増え、うわさもあり10人、20人と輪が広がってきて、友人も連れて来るようになりました。中には身体障害の方がいて、事故で歩けなくなったという話がありました。それで役所の障害課の課長さんと呼んで話をみんなで聞きました。あるいは保健所の保健婦さんに来てもらって、けがしたときの対応の仕方を教えてもらいました。そうこうしているうちに、その方たちとも親しくなり、お互いに学び合い話し合うことが楽しみになってきました。

昼間仕事で参加できない人もいるため、夜に開催することにしました。これをみんなで「寿夜間学校」と

名づけました。憲法の話などもやりましたが、一番人気のあるのは私の自叙伝という授業でした。はじめは恥ずかしがっていましたが、たまたま、ある人が戦争体験の話をしたときです。日雇いのおじさんたちが、みんな鉢巻きを取って涙を拭いながら「そうかー、そうかー」と言うわけです。話しが終わった後みんなが集まってきて、「大変だったなあ」「きょうは俺がおごるから飲めや」と。こうして仲間意識がどんどんどんどん広がっていくんです。

それからこの町の人たちが自分の好きなことで、野球チームや俳句会など、あっという間に30近くもつくりまします。5、6人から多い会では10～15人、身体障害者の友の会もできました。それぞれに代表がいるわけですが、その代表たちが時に「集まろうや」って声をかけました。話したことは一応記録も取る。ここに地域の住民懇談会、今で言う町内会、自治会ができました。みんなが話していると、無料で診てくれるお医者さんが欲しいことが共通の願いでした。それで飛鳥田さんのところにみんなでお願いに行きました。いい人だね、飛鳥田さんは。費用を全部出すといってくれました。ただ、医者は自分たちで探すことになり、みんなでいろいろ探して、佐伯輝子さんという先生が来てくれることになります。

これは僕にとって、大変大きな勉強でした。一人ひとりがいろんな所から切り離されて、家族も捨て、仕事も捨て、故郷も捨てて出てきた人ばかりですけど、この地で新たなつながりが生まれることになります。

◇大学の教員の役割

1982年末から翌年2月にかけて、寿町等でホームレスの日雇いのおじさんたちが次々と横浜市内に住む中学生を含む少年のグループに殴り殺されるという、横浜浮浪者襲撃殺人事件が起こりました。その子どもたちのことを調べていったら、授業についていけないとか、家の中でお父さんとお母さんが非常に陰悪で、いつもお父さんに殴られていたなど、大変な経験をしている子どもたちが多かった。やっぱり子どもたちの問題にちゃんと向き合いたい、また子どもたちに寿の人たちのことを伝えたいと思って、僕は児童相談所に行きます。児童相談所で10年やりました。当時不登校とか引きこもりがだんだん顕著になってきましたが、その背景には地域社会になじめず孤立した家族がありました。

それで、僕は地域のことを担当する児童相談所にすべきだと話したんですけど、なかなか認められませんでした。そうこうしているうちに、50の年に本当に偶然ですが、横浜市立大学の先生方と一緒に子どもの調査とか、寿の調査と一緒にやることになりました。そうしたら先生方が、「あんたみたいな人が市大に来たら面白いけどな」って言われて。冗談みたいな話ですが試験に奇跡的に合格し、大学の助教授になったんです。

それで、僕は地域と大学をつなげる以外に方法ないものですから、大学が立地する金沢区の人たちと一緒に精神障害や不登校などの方たちと、大学の施設を使って勉強会を始めます。地域の中で、精神障害者の地域作業所がつくる運動を一緒にやったり、不登校の子どもたちの親御さんたちと保健婦さんたちと一緒に勉強会も始めました。その集まりが、いま「フレンドリースペース金沢」という、行政も一緒に応援してくれている不登校の当事者の居場所になっています。また、学生と地域の人たちが一緒に勉強したらいいなと思い、研究会を立ち上げました。名前は社会福祉研究会は簡単過ぎると思い、「社会臨床研究会」としました。今日では、日本社会臨床学会もつくられています。

◇沖縄大学へ

2001年9月11日にアメリカの世界貿易センターに飛行機が2機飛び込みました。あの映像をテレビで見て、全身ぞーっとしました。これから戦争が始まるのでないか。人間が本当に生きる目的を忘れたというか、利益を追求し、他者が苦しんでいることもほったらかしにするような、そういう時代にこれから入るのではないか。もう一回人間とは何だったのか、生きる目的は何だったのかを自分の中で取り戻さないといけない、大学でのんびりやっていたのは駄目だなと思って、辞めようと決心していました。

そうしたらたまたま、子どもの福祉をやる先生を募集している沖縄大学のチラシが目がとまりました。何年募集しても先生が来ないが、今年を最後になんとか実現したいという内容でした。すぐ電話して、面接を受けました。募集要項には50歳未満の児童福祉論をやる人と書いてありました。当時60歳でしたが、「本当に来るか、最低5年はいてくれよ」と言われて、採用されました。結局12年いることになりましたが、行きました。それから家内と一緒に沖縄での生活が始まります。これは僕の人生観をまるっきり変えました。というか、今まで求めていたものがはっきり見えてきたことになりました。

◇沖縄の文化・思想を知る

2002年に着任して、まず子どもたちの養護施設を学生たちと一緒に回りました。ひどい状況でした。子どもたちもご家庭もとても貧しかったです。施設も非常に厳しい状況で、子どもたちが大きな広間にごろ寝をしているような施設もありました。これは大変なことだと、まず子ども研究会をつくることになりました。ただ、大学だけでやっていたのでは宮古島、石垣島等の離島や、山や森林など自然が多く残っているやんばるの地域のことはわからないということで、約5年間かけて県下45島を全部回りました。2007年にはフィールドワークをまとめた『海と島の思想』という、沖縄の独特の文化や思想を伝えるために本を出しました。

今後衰退していくか、発展していく可能性があるか、地域の人は実によく知っています。「子どもと女性が元気な所は必ずいい島になる」と言います。島では必ず教育立村を挙げています。そして共同売店というのがあります。個人のお店ではなくて集落の住民が共同で出資・運営する商店です。ここの利益は、まず子どもたちのために使います。返さなくていい奨学金をつくる、食べるに困った人にお弁当をタダで配るなど、今でもやっています。

◇生きていくための2つの目的

沖縄で14年やってきて、人間が生きてく目的、これは二つしかないことを沖縄で教えてもらいました。一つ目はまず生きることです。生きていないことには生きる目的なんか言うこともない。第2次世界大戦のときに、沖縄では4人に1人が亡くなりました。家族が全員いなくなり、自分が1人だけ残ったらどう生きてくか。苦しい状況、危機的な状況、困難な状況に陥ったときに、人はどうやって生き抜くのかということです。今回の翁長知事が亡くなったあとの知事選挙では、沖縄に行かずと玉城さんの応援をしていました。勝ってほしいと思っています。辺野古で一緒に座り込んでいるときに、「一番人間が大事なこと？ 決まっているさー、生きることさー、生き抜くことさー。辛いときはどうするか言うたら、1人じゃ生きられんよ。どんな人間も1人じゃ生きられん。1人じゃ死ぬことしか考えん。仲間と一緒に生きることが生きることさー」と聞いていました。つまり、共に生きることが生きる目的だということがはっきりしました。

二つ目は、「そうは言ったって100を超えたらみんな死んじゃうわ。みんなあの世へ行っちゃう。その後続かないとどうにもならない。子どもができて、子どもをみんな育てて、子どもが育つこと、子どもを育てることが人間の目的さー。だから、うちは<命(ぬち)どう宝>と言うよ。命こそ宝。どんな子どもが生まれても、どんな状態になって生まれてきてもそれは宝さ。子どもは宝さ。その子どもたちを育てること、これが生きる目的だー」と。つまり共に生きることと、みんなで子どもたちを育てること。このことが実は生きる目的で、それが全てだと言います。こうしないとこれまで人間は生き抜いてこられなかった。

いま子どもの政策について沖縄はものすごく取り組んでいます。日本一だと思っています。3年間かけて2017年に『沖縄の貧困白書』を発行しました。沖縄の子どもたちの29.9%が貧困です。日本の平均は13.9%。このことが明確に出たことで、沖縄県は「沖縄モデル」といわれる政策を軸に置くことになりました。

◇生きる現場は地域

現在、横浜に戻ってきています。沖縄大学の学長2期目の途中で体調を崩したためでした。今では現場は

地域だと確信しています。74歳で地元の町内会の老人クラブに入りました。なり手がなかなかなくて、やっている方も年をとって、つぶれるかどうかというところですよ。「70代の前半が入ってきた、久しぶりだ。青年部を頼むわ」って言われました。依頼されて会報を作ってみたのですが、メンバーの写真を沢山入れて、字を大きくしたら、これがとっても面白いと評判になりました。

その後、どうしてもなり手がいないということで、会長を引き受けることになりました。会報で自分史の掲載を企画しました。はじめは断られていましたが、少しずつ会報等を通じてみんなが知り合ってくると、びっくりするくらい仲良くなってきました。今ではもう大ぜいの方がつながって、いろんな企画が始まっています。ついに合宿までやることになりました。また、地域にあるいろんな所と関係を持ちたいということで、公園の掃除で出会った子の学校へ行って給食と一緒に食べたり、地域の商店も回り始めました。そうすると八百屋さんを大事にしなきゃとか、銭湯に行って食事をして帰ってきます。

それから、駄目かと思って話したら、老人クラブで「田谷シニア大学」も始められることになりそうです。地元出身の人や移り住んできた人の話を聞いています。そうしたらこれもお互いを知る機会になり、今まで分断していた関係がほぐれてきています。いま老人会は、女性軍がどんどん元気になってきています。次の会長さんは女性にしてもらおうという動きも出てきました。もちろんカラオケやゲートボール、草刈りなどの参加者がドンドン増えています。

◇地域の主体は誰なのか

先日、地域の中でアンケートを行いました。一番多かった意見は、いつでも行けて安心して飯が食える場所が欲しいでした。こうなると、社協とか、行政と交渉したり、議員さんの力を借りなくてはいけません。これは自治会が軸になって進める必要があります。取りあえず老人会、町内会が自由に使える場所、空き家が6軒ぐらいあります。そこに子どもたちやお年寄り、障害者も外国人も来られるような場所、コミュニティセンターをつくるのがみんなの夢になっています。

もう一つは、そうした場になかなか来にくい人との関係をどうつくるかがあります。みんな事情はよく分かっています。だから地域のコミュニティづくりをするソーシャルワーカー、これをぜひつくって欲しいといひます。そのためにはコミュニティ・ソーシャルワーカーに給料を払えるようにしたい。まずは町内会、自治会のあり方をもう一回見直していく。こうしたお互いが共有していくようなことをぜひやりたいなと思っています。

(かとう あきひこ)